

## 「女性の働きづらさ」の根幹を知る

OOK

新刊届きました



## 『働く女子の運命』

濱口桂一郎著  
●780円(文芸春秋)

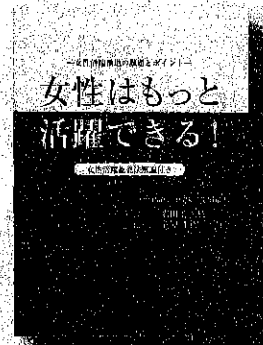
日本型雇用の分析で知られる著者が、雇用システムの成り立ち、海外比較も交えながら、女性の労働環境改善に向けた論点を提示。



## 『「見えざる手」と「見えざる心」』

平尾桂子著  
●1250円(ぎょうせい)

自らの子育て体験も交えながらケア労働の意味を説く。たとえ話が秀逸で、「女性活躍なんて聞き飽きた」と歯切れがよい。



## 『女性はもっと活躍できる!』

岩田喜美枝、菅原千枝著  
●1900円  
(公益財団法人21世紀職業財団)

アドバイスを項目ごとにまとめる。女性の意識と育成に関する調査結果、また女性活躍推進法に関する解説付き。

「女性活躍を進めるといっても…。こんな状況でどうやって?」

モヤモヤを抱えている人は少なくないだろう。女性活躍推進の課題、「女性の働きづらさ」の根っこにあるものは何か、どうすればいいのか。疑問を解く手がかりになる3冊を紹介する。

『働く女子の運命』で濱口桂一郎氏は、日本型雇用の成り立ちを基に女性の働きづらさを鮮やかに分析する。第1次世界大戦以降、給料とは妻子を養うための「生活給」という考えが浸透し、戦後を迎え労働組合との交渉でその仕組みが確立する。そこで生まれたのは「『女房子供を養う』男性の生活給に見合う賃金に、女をあずからせること自体が論外」というイデオロギーだ。

こうした価値観を支える終身雇用、年功序列は、1990年代半ばから変わりつつある。とはいえ、現行の雇用制度も、多くはその延長線上にある。

日本的雇いを、濱口氏はまた「メンバーシップ社会」と評する。多様な職務を企業の命令に従って遂行しながら仕事を覚え、年功的に賃金も上がると

いうものだ。残業も転勤も「無制限」な働き方ゆえ、子育てなどで「時間制限」のある女性社員は仕事を続けにくい。

では、どうすればいいのか。一つの解として、男女ともに時間・勤務地に制約を設ける一般職的働き方を広げることが筆者は提案する。メンバーシップ型をどこまで残すか、切り崩せるか。こうした問い直しが、女性ひいては男性の働きづらさを変えていくのだ。

## 妻は夫に「ちやぶ台返し」しない

家族、労働をジェンダー視点で研究してきた社会学者、平尾桂子氏による『「見えざる手」と「見えざる心」』では、こんな例が引かれる。「誰のおかげでメンが食えると思ってんだあ!」とちやぶ台をひっくり返す暴君夫のイメージは共有されているが、その逆はない。「誰のおかげで家事もせず仕事に行けると思っているのよお!」と夫に向かいちやぶ台を返す専業主婦の姿である。

いわずと知れたアダム・スミスの「見えざる手」を裏で支えてきたのは、子供を産み育て、高齢者を介護する「見え

ざる心」だと、平尾氏は説く。見えざる心による「ケア行為」は、女性たちの無償労働によるものだった。

もし働きながらケア労働を担うと、コブ付きで生産性が低いと見なされる——。私たちは、ケア労働を担う社員に「ペナルティー」を課していないか。経済合理性で考えがちな企業人に、いま一度立ち止まって考えることを促す。

具体的に何をすべきかを知りたいなら『女性はもっと活躍できる!』が手引きとなるだろう。資生堂副社長などを務めた岩田喜美枝氏らが、管理職や女性社員向けの助言などを盛り込みながら、企業で取り組むべき施策を説く。発行元の21世紀職業財団は、30年前に男女雇用機会均等法の施行を受けて誕生した。女性の活躍を後押ししてきただけに企業の実情に詳しい。◎

Writer

ジャーナリスト・淑徳大学教授

野村 浩子氏

日経BP社「日経WOMAN」編集長、日本経済新聞・編集委員などを経て、2014年4月より現職。著書に「定年が見えてきた女性たちへ」など。